

インドネシアの社会的特性を踏まえた国際理解教育

前ジャカルタ日本人学校教諭

石川県白山市立鳥越小学校教諭 上田 大樹

キーワード 国際理解教育、ジャカルタ、国際交流、社会的特性、イスラム教

赴任校の概要 (2022年7月29日現在)

ジャカルタ日本人学校

JAKARTA JAPANESE SCHOOL

URL: <https://www.jjs.or.id>

児童生徒数 幼稚部 87人 小学部 356人 中学部 108人

1. はじめに

インドネシアのジャカルタ日本人学校(以下 JJS)に赴任し、3年間勤務させていただいた。日本と大きく異なる文化・自然・人々・価値観などを現地現物で感じることができ、学校現場でも替え難い経験を積むことができた。2年目は、コロナ禍もあり、教育の完全オンライン化を実施したり、3年目は、そこからの復活のために新しい生活様式となる教育活動を検討したりと、様々な面で満足いく実践ができなかったことは心残りだが、その中でも考え工夫しながら国際理解に関する教育を進めることができた。以下で、インドネシアの社会的特性を生かした国際理解教育を実施するに至った流れやその概略を紹介したい。

2. 国際理解教育の現状

(1) 教育課程で位置付けた学習

JJSとして、国際理解に力を入れて取り組んでいる。インドネシアという国やそこに住む人々を理解し、敬意をもって接したり、協力する態度を身に付けたりできる児童生徒を育むため、全学年が年間指導計画にインドネシアに関わる学習を計画し、毎年実施・改善をしている。学習内容は、以下の通りである。

- ① インドネシア語・文化学習…インドネシア人教師による週2回の授業
- ② テーマ学習(総合・生活) …全学年の課題解決学習(動植物・町・伝統・環境・民族・歴史)
- ③ ヘリテージ(遺産・伝統) …年1~2回の保護者有志によるインドネシア文化講義

これらの学習を通して、児童生徒には、インドネシアについての一定の理解や異文化を大切なものとして捉える態度が育まれている。とりわけ、日本から来たばかりで、インドネシアのことをほとんど知らない児童生徒にとっては、生活に馴染み、様々な経験をしていく上での大きな助けとなっているようで、それはこれらの学習後の振り返りなどを見てもよく感じられた。

- ・小学校2年生の活科「インドネシアの果物博士になろう」の果物調べでは…「日本にないおいしい果物がたくさん知れました。スーパーで、パパイヤとドラゴンフルーツをお母さんに教えてあげたいです。」
- ・小学4年生のヘリテージ「バティック*の秘密を調べよう」でバティックの種類を学んだ後には…「模様や柄に意味があることを初めて知りました。運転手さんや先生が着ているバティックを見て、確かめたいです。」といった振り返りがあった。

*インドネシア・マレーシアのろうけつ染めの布地

(2) 現地の人やものに触れる体験学習

上記①～③に加え、JJS では体験的な学習を、学年に応じた内容や頻度で年間指導計画の中に位置づけている。日本とは全く違うものに触れ、現地の人と話し、日本との共通点や相違点、現地のよさなどを、体験的に学ぶ機会を大切にしているのである。具体的には以下の2点である。

④ 校外学習 … 現地の文化・歴史に直接触れる体験

⑤ 現地校交流 … 現地の児童生徒と学習交流する体験

校外学習では、②の総合や生活で行ったテーマに応じて実施している。例えば、小2では植物学習⇒マカルサリ果樹園訪問、小4では伝統学習⇒パティック制作体験、中2では歴史学習⇒バンドンへ修学旅行に行くなどである。事前学習をしっかりと行うこと、事後のまとめ学習を充実することで、より学びを深めることができていた。見て・聞いて・触って（時には味わって・嗅いで）と五感を使って全身で学ぶことは、ダイナミックに異文化を感じることであり、児童生徒にとって替え難い経験となる。

また、現地校交流は、1年に2回の頻度で行う。交流して互いを知ることはもちろん、発表したり意見交換したりする場も設定することで、コミュニケーションに必要なことや考え方を学び、事後の達成感や充実感につながっていた。インドネシアに生活しながら、現地の子どもたちと触れ合うことのできる機会は多くない。日本人学校がその役割を担うことは非常に大きいだろう。

(3) 課題

一方、これらの学習だけで、児童生徒が相手を真に理解し、文化に敬意をもって接し、協力する態度や力をつけられているかといえば、不十分だと言わざるを得ない。事実、上記①のインドネシア語・文化学習については、児童生徒の意欲や言語習得において大きな課題があることが明らかになっている（学校評価より）。また、②の総合や生活での課題解決学習についても、児童生徒が学びを実践的に生活に生かす態度や力をつけているとはいえないだろう。教職員にも、学習がこれらの表面的なもののみであってはいけないという問題意識が強く、貴重な場で学ぶ児童生徒たちにいかにして確かな国際理解の力を付けていけるかが、常に議論になっていた。

そこで力を入れたのが、インドネシアの社会的特性に基づいた実践である。インドネシアの国や人々を語る上で、社会の様子や人々の価値観などを知ることが欠かせない。それらを感じ、深く国や人々のことを知らなければ、確かな国際理解にはならないと考えたのである。

3. 社会的特性に基づく実践

(1) イスラム教

インドネシアはムスリム（イスラム教徒）人口が世界最多で、町の至る所にモスクが建ち並んでいる。JJSにもインドネシア人スタッフが多数在籍し、校内施設にも簡易礼拝所がある。児童生徒も現地に定住する家庭の子も少なくなく、そのような家庭はムスリムであることが多いし、家庭で雇う運転手やメイドもムスリムであることがほとんどである。つまり、日本から来た児童生徒にとって、イスラム教の存在は非常に近いといえる。

授業で取り上げたのは、「ラマダン（断食）」と「犠牲祭」である。

①ラマダンと断食 … イスラム教の六信五行に定められる。イスラム暦の9月の1ヶ月間、日の出前から日没まで飲食をせず、善行や宗教的实践に励む。

②犠牲祭 … 預言者の信仰を讃える祝祭。羊や牛を贄として神様に捧げ、その肉は貧しい人々や近隣の方々に分けられる。

まず①については、教室の何人かの友達が昼食時間に何も食べていなかったり、普段使う車の運転手が空腹などで普段と様子が違ったりと、児童生徒もよく目にする題材である。ただ、「なぜそのようなことをするのか？」「人々はどんな思いで断食をしているのか？」という点については、多くの児童生徒はよく知らない。したがっ

て、その学習をすることが重要と考えた。

実際の小学4年生の授業では、JJSのインドネシア人職員に、実体験や小さい頃から教わっていること、思いなどを話してもらうことができた。具体的には、イスラム教の大切な教えの中に断食があり、断食中はおなかが空き喉も乾くが、やり遂げることで幸せになれると信じていること、断食が終わって家族でごはんを食べることが何よりうれしいこと、断食を通して「修行で強くなった自分・周りの人や食べ物への感謝・やさしさ」などに気づけるようになったこと、周りの断食中の人に応援や優しい声掛けをしてほしいことなどである。

これらの話から、児童は多くのインドネシア人が大切にしていることを学び、その実際の話から自分なりにたくさん考えをもっていた。そしてそれは、クラス内にいるムスリムの友達や家の運転手などにどんな心遣いをすればいいかという、生活につながる学びになっていたようである。以下が授業後の振り返りである。

- ・なぜ断食をするかが分かりました。インドネシアの人にとって、欠かしてはいけない大切なことだと知れました。お昼ごはんのときに、Y君が図書室に行くのががんばれと言いたいです。
- ・1日の断食が終わってから、お父さんが「飲んで」と言って、車の運転手さんに飲み物をあげていました。とてもうれしそうにしていたので、ぼくも応援したり何かしたりしたいと思いました。

実際に断食を行っているインドネシア人の職員からリアルな話を聞いて考えることができたこと、断食を行う友達や運転手が身近にいることなど、JJSならではの環境を生かして、より実践的な学習を進めることができたと感じている。

また、②については、毎年その時期になると牛や山羊が街中でたくさん売られ、裕福な者が購入してモスクに贈呈し、近所の人が集まりご馳走になる。モスクでは大勢の人前で牛や山羊が神の生贄になるため、日本的な考え方なら「ひどい」「残酷」となるのかもしれない。実際、「かわいそうだよ」と児童に言ってしまう一部の教師もいたほどだった。しかし、宗教に裏付けられた現地の文化や考え方は、我々が思っている以上に人々のアイデンティティとなっており、軽々しい言葉で否定してはいけない。まず、教師が異文化の独自性や豊かさに心を開き、価値のあるものと捉える姿勢や言動が、子どもの国際理解の態度につながる。

実際の5年生授業では、犠牲祭を扱い、その歴史・意義・人々がどう思って参加しているのかなどについて、

断食同様にJJSのインドネシア人職員に話してもらい、学びを深めていった。犠牲祭の写真を見て事実を知ると顔をしかめる児童も最初は多かったが、どのような背景で行うようになったか、参加している人たちの思い、その行事にこめられた感謝・忠誠・他者への思いやりなどの願いを学ぶにつれて、受け入れる態度や理解する心につながっていったことが見て取れた。また、日本と比べて考えようとする姿がとても印象的であった。具体的には、日本の節分や一風変わったお祭りなどの行事がインドネシアの人から見てどう感じるかを聞いた後に、「日本にも同じように珍しい行事があるかもしれない」という意見が聞かれたのである。そこから、自分たちと同じように大切にしていることがあることを理解し、それを尊重し合うことが大切なことに、児童が気づいたことが分かる。インドネシアの国や人々の考えを、より正しく理解するきっかけになったと感じている。



インドネシア人職員による犠牲祭の話

ここからは、自分たちと同じように大切にしていることがあることを理解し、それを尊重し合うことが大切なことに、児童が気づいたことが分かる。インドネシアの国や人々の考えを、より正しく理解するきっかけになったと感じている。

ただし、これら①②については宗教に関わる話であり、価値観や考えを断定的に伝えてしまうことだけはないように注意しながら、実践にあたった。日本人は、宗教や信仰が関係する話には非常に疎い面があるため、客観的な事実や当事者の思いなどに触れることを中心にして学習を進めたことだけは申し添えておく。

(2) 環境問題

インドネシアはまだ環境問題への対策に関しては遅れている。身近なところでいうと、ゴミの分別は全くなく生ごみも瓶も乾電池も全て一緒に袋に入れて捨てることになっている。それがどのように処理されているかは追及できていないが、初めて来た日本人は一樣に驚く。

ある川沿いの写真に衝撃を受け、授業で活用した。それは、川一面にありとあらゆるゴミが敷き詰められ、人々はその川で水を汲んだり子どもたちが笑顔で遊んだりしているものである。これを見た児童の反応は、一樣に「川にごみを捨てるなんてだめ」というものである。誰もがそのような感覚になるだろう。環境という側面からそのような言うことは簡単なことである。しかし、これには貧困、格差、教育などのより複雑な問題が絡んでおり、それを理解させることが何よりの国際理解だと考えた。



5年総合「環境問題」で使った写真

小5の授業では、まずこの川の両側にある無数の家々を写真で紹介した。木を簡単に組み立てた小屋がたくさん並んでいる印象であり、児童はそれを見て「こういう家に住んでいる人もいるのか」と正直な反応を示していた。そして、インドネシア人の職員からインドネシアが抱える格差の問題や収入が少ない人たちの貧困、そういった人たちの中には満足いく教育が受けられない人もいたり環境を大切にしなければいけないと考える余裕のない人もいたりすることなど、インドネシアの現状について具体的に話してもらった。これらを学び、児童は以下のように振り返っていた。

- ・インドネシアは大きなマンションに住んでいる人もいれば、今日授業に出てきたようなところに住んでいる人もいて、その差は直してほしいと思いました。
- ・環境問題がよくなるように、しっかりとみんなで教え合って生活しないといけないと思います。
- ・日本ようになってほしいけれど、今のままでは簡単ではないと思いました。収入が少なくならないように、小さいうちから勉強することが大切だと聞いて、インドネシアの人にもどんどんそうやってほしいし、自分もしっかり頑張ろうと思いました。

振り返りからは、単なる環境問題という枠を超えた学びがあったことが分かる。一面的ではなく、本質的な問題を捉えて、多角的な国際理解につながったと感じている。

4. おわりに

各国で生活する児童生徒も近年多くなっている。日本でも、非常に多くの外国籍の児童生徒が増えており、それは今後も増え続けるだろう。そんな中で、様々な国籍の人たちと共生していくためには、国際理解の力が欠かせなくなる。

JJSの取り組みと同様に、どの在外教育施設においても、教育課程に位置付ける学習・現地の人やものに触れる体験学習などは進めているかもしれない。その上で、児童生徒がその国のことや人々のことを実感し、より深い国際感覚を身に付けるには、その国の社会的特性を踏まえた適切な学習を実践しなければならないと考える。日本国内の学校にいる外国籍の児童生徒においても同様である。その出身国の社会的特性をしっかり捉え、その児童生徒の背景にあるものを把握し、授業を通して学級全体でその理解を進めることが必要となるだろう。そのためには、自身が児童に学ばせたいことを明確にして教材化したり、より詳しい話ができるゲストティーチャーに現実に即した話をしてもらったりと、工夫が必要になるだろう。その努力を厭わず、これからのグローバル化の中に生きる児童生徒に、確かな国際理解の力をつけていきたい。